



沖縄県祖国復帰47周年記念靖國集会

## 青年弁論大会



当QRコードを読み取る  
と各弁士の弁論を動画  
でご覧いただけます。

# 「日本民族にとっての沖縄」

一般社団法人 日本沖縄政策研究フォーラム

## 決議文

本日、沖縄県祖国復帰四七周年を記念して、「日本民族にとっての沖縄」というテーマでの青年弁論大会を開催した。八名の若い弁士の沖縄の歴史に対する深い理解と情熱あふれる演説に参加者一同大いに感動した。

その感動の元をたどれば、「民族の一体感」「日本民族の同胞意識」にたどり着く。つまり、われわれは、この感動の瞬間に、日本民族の精神を取り戻したのだ。

現在、新聞マスコミの報道では、沖縄の人々が日本人と対立した別民族であるかのような報道をしているが、本日の弁論大会は、一氣にそのような嘘を振り払うものであった。

沖縄戦の歴史は民族一丸となった祖国防衛の歴史であり、沖縄県祖国復帰の歴史は、日本民族再統一の歴史である。正しいこれらの歴史を後世に語り継ぐことこそ、日本民族を再び団結させるのである。

令和の時代を日本の民族精神復興の時代とするために、以下決議する。

- 一、三年後の五十周年を日本国民全体で祝い、一万人規模の大祭典の開催を実現する。
- 一、この祖国復帰記念日を国民の祝日になるように、全力をあげて国会議員、及び政府に働きかける。
- 一、来年以降も毎年五月には、沖縄県祖国復帰を記念した青年弁論大会を開催する。
- 一、若者を中心とした祖国復帰を実現した先人の情熱と功績を発掘する研究会を発足し、後世に伝えるべき歴史を編纂する。

令和元年五月十二日

沖縄県祖国復帰四七周年記念靖國集會参加者一同







## 国民同胞感と祖国防衛の精神の恢復を目指して



優勝

神谷 龍 (24)

沖縄県宜野湾市出身



そもそも自分は日本人なのか、沖縄人なのか。日本民族とは別の「琉球民族としてのアイデンティティー」を強調し始めた基地反対運動と、「いつの時代も沖縄は日本に巻き込まれ、利用されてきた」という被害者の視点から語られる歴史教育がこの問いを生み、私の頭を悩ませました。

その中であって、確固たる自分のアイデンティティーを求めて学び始めたのが沖縄戦と祖国復帰の歴史です。沖縄戦がいかに激しい戦いであったか、筆舌に尽くし難い当時の状況を改めて認識しました。そしてその戦いに、私よりも若いほんの中学生ほどの男子生徒や女子学生までが、「祖国のため」という言葉を遺し、若い命を散らしたことに涙が出てきました。「戦争に巻き込まれた」という被害者史観とは真逆で、戦争という時代の運命から決して逃避することなく、祖国防衛の使命を自覚し、国家の主体者として一生の全てを尽くした悲しくも尊ぶべき沖縄県民の姿を見ました。字義通り、「我が身を盾にして」日本を守った沖縄県民は、立派な日本人であったと心から思いました。

それにもかかわらず戦後27年間、沖縄は米軍統治下に置かれますが、その中であって県民一人一人が願い、選んだ道は、異民族への従順でもなければ、沖縄独立でもない、祖国日本への復帰でありました。「沖縄県民にとっての日本」とは紛れもなく祖国であったわけです。私達沖縄県民の先輩方は、戦時中は命懸けで祖国を守り、戦後はたとえ国土が分断されようと復帰の実現によって沖縄と本土の「日本民族としての絆」を守り抜かれたことに気付きました。この歴史に感謝と誇りの念を抱くと共に、沖縄にこそ祖国防衛の使命があることを感じます。

祖国復帰の真実、日本民族にとっての沖縄とは何かを語るにあたって、私が忘れてはならないと思うのが金城和信（きんじょうわしん）先生です。しかし、和信先生は沖縄の祖国復帰を声高に訴えた方ではありません。この方は、沖縄戦の戦死者の遺骨拾収と慰霊、そして遺家族への支援に余生の全てを捧げた方です。占領初期の沖縄では至る所に遺骨が散らばっていても、その拾収は米軍に敵対行為とみなされる恐れがあったので、誰一人手を触れようとしませんでした。また、祖国に殉じた方やその遺家族に対して物心両面から処遇することは、本来国の務めではありますが、当時は日本に主権はありませんでしたので政府も何もできませんでした。その状況の中、和信先生は「遺骨の拾収によって刑に処せられることがあるならば、自分は喜んでこの首を供する」と断言し、命懸けで同胞の遺骨を拾収し、遂には慰霊塔を建立しました。それが魂魄（こんぱく）の塔、ひめゆりの塔、健児の塔、しづたまの碑であります。祖国の運命に命を捧げたのにもかかわらず、その御霊は還る場所を見失い、且つ見捨てられかけていた中、日本政府と一億国民に代わって唯一人和信先生は手を差し伸べ、「国のいのち」に連なった存在として祖国のもとに還

優勝

神谷 龍

(24)

沖縄県宜野湾市出身

し、御霊を守ったのであります。

慰霊とは国民の務めであり、その意味は「御霊安らかなれ」と祈ることに加えて、御霊の精神の顕彰、歴史の継承にあると思います。沖縄戦で命を散らした御霊の精神とは、祖国を守らむとする防人の精神そのものです。そして自分達、沖縄県が祖国に復帰するよりも先に、国に殉じた家族・同胞を祖国のもとに還したことが、「自分達もそこに連なり、必ず祖国のもとに還るんだ」という祖国復帰の信念の源となり、その実現につながったのだと思わずにはおれません。この5月15日という日は、英霊・沖縄・祖国が一体となった日本民族共通の歴史です。これが祖国復帰の真実であり、日本民族にとって沖縄とは同胞、一体であることをおいて他にありません。

私は、学生であった昨年、仲間と共に全国41大学を巡り、5021名の学生に対して自衛隊を憲法に明記することについての賛否を伺うアンケートを行い、「よく分からない」と答える学生には対話する中でその意義を伝えてきました。理由は、航空自衛隊によるスクランブル発進の回数が年間1168回を記録したこと、すなわち国の存立を脅かす危機が目前に差し迫っているにもかかわらず、国家の最高学府たる大学の学問が現実と乖離していたからです。特に憲法改正が国民の注目を集めている中に受講した「日本国憲法」の講義の内容は、全15回の内11回が人権論と偏っていました。今、真に語るべきは人権よりも国家主権ではないでしょうか。

アンケートの結果、85%にあたる4276名の学生が「憲法への自衛隊明記には賛成」と答えたのですが、そこで見た学生の実態は「自分には関係ない」、「戦争になって被害を受けるより白旗を上げた方がよい」という発言をする、国防の意識が欠落した無責任な個人の姿でした。この実態に一層危機感を覚えると同時に、祖国日本を守った沖縄県民の後に続く者である自分こそ憲法改正に力を尽くす決意を固くしました。

私にとって憲法改正とは、決して自衛隊明記に留まるものではなく、国民同胞感と祖国防衛の精神を恢復（かいふく）する「国民精神の立て直し」であり、沖縄戦、祖国復帰に連なる日本を守る戦いです。私は今年の4月に就職し、社会人となりましたが、改めて祖国復帰の日を心に刻み、自分の立場から日本を守る戦いを全うしていきたいと思います。



## 沖縄を守る日本人が忘れてはいけないこと

準優勝

小西沙紀

(25)

埼玉県川越市出身



まず始めに、私の出身は沖縄ではありません。正直に言うと、沖縄についてもあまり知らない方だと思います。しかし、私は紛争地のパレスチナに行った経験があります。この経験から、皆さんに何か感じてもらえればと思い、今ここに立たせていただいています。

私がパレスチナに行ったのは、アラビア語を学ぶためにパレスチナに留学していた親友がきっかけでした。ちょうど海外旅行に行こうと思っていた私はパレスチナを行き先を選び、一昨年2月に1週間滞在することになりました。

私は、パレスチナにてこのような経験をしました。

親友と一緒に夕飯を食べている時にすぐ近くで、ドン！と銃声の音が鳴り響きました。一瞬何が起こったのか分かりませんでした。大きな銃声がその後も何度か鳴り響き、男性の怒鳴り声と救急車の音が遠くで聞こえました。私はその日生まれて初めて、死の恐怖で震えながら寝ました。次の日になってもその出来事はニュースにもならず、軍事練習だったという噂が流れるのみでした。結局、あの銃声は何だったのか、その真相はいまだに謎に包まれています。

皆さんは日本で街中を歩いている時、「銃を向けられるのでは」、「殺されるのでは」など考えたことがありますか？恐らくないのではないのでしょうか。

パレスチナと対立しているイスラエルの国境には壁があります。その壁には、さまざまな意味を含んだ落書きが描かれています。例えば、パレスチナの国旗を掲げ自由を求めるパレスチナ人の絵。その隣には、銃をパレスチナ人に向けるイスラエル兵士の絵。また、別の場所には、平和を象徴する鳩の絵があるのですが、その鳩は防弾チョッキを着せられ、その胸には銃口が向けられていることを意味する赤いレーザーサイトが描かれています。壁の近辺にはイスラエル兵士が銃を持ち、パレスチナ人を見張っています。少しでも壁を壊そうとしたり乗り越えようとするものなら、射殺されてしまうことでしょう。パレスチナ人にとって日常は常に死と隣り合わせなのです。

皆さんはお金さえあれば海外旅行に行くことは難しくないですよね？パレスチナ人にはそれができません。対立しているイスラエルの目があるためです。私はパレスチナの大学で、日本語を勉強している大学生に会いました。彼らは一生懸命ひらがなや漢字を学んでいました。彼らは日本に旅行に行きたくても行けません。日本人が当たり前に行けることが彼らにはできないのです。

また、皆さんは普段手帳を持ち歩き、1ヶ月先の予定も当たり前のように決めると思います。しかし、パレスチナ人は手帳なんか持ちません。決めるのは今日や明日の予定だけ。いつイスラエルにまた占領され殺されるか分からない。「自分には明日が来ないかもしれない」と潜在的に思っているのかもしれない。

このような環境にいるパレスチナ人が、「基地があるから戦争が起こるんだ」なんて言うと思いますか？平和ボケしている日本人だからそのような声が出るのです。





準優勝

小西沙紀 (25)

埼玉県川越市出身

安全が保障されていて教育も自由に受けられる。日本人がこんなに裕福に暮らせるのは戦争で戦ってくれた先人たちがいたからです。大東亜戦争では沖縄も戦場となりました。沖縄で戦ってくださった兵士の方々、沖縄県民の方々は、想像を絶する恐怖を感じたことでしょう。戦後壊滅状態だった、復興不可能だと思われた日本がここまで裕福な国になったのは、私達の先祖が経済の発展のために努力をし、日本人としての道徳心を受け継いでくださったからです。

沖縄が祖国復帰できたのも、佐藤栄作さんや仲村俊子さんを始め、当時の先輩方が活躍してくださったからです。

私はパレスチナに行って、今自分が当たり前だと思っていることが、当たり前ではないということを知りました。だから何事にも感謝をしようと思えるようになりました。今私たちが自由に学べていること、色んな国に行けること、娯楽があることは当たり前ではないのです。

私のやりたいことは、この事実を、感じたことを周りに発信し、少しでも皆さんが今の生活に感謝をしたり問題意識を持ったりするきっかけを生むことです。大学生の時に地元のコミュニティカフェという地域の集いの場で中学生に勉強を教えていました。今後、そこで機会を作り、沖縄やパレスチナのことを発信していこうと考えています。また、考えを文章にして広く発信もしていきたいと思います。そして今ここで、パレスチナの問題と沖縄を繋げて話しているのも、パレスチナという土地で銃声を聞き、貴重な経験をした私だからこそ発信するのだという使命を持っているからです。こういった活動を通し、日本人としての誇りを持ち、先人たちの想いを受け継ぐ人たちを増やしていきます。そもそも自分は日本人なのか、沖縄人なのか。日本民族とは別の「琉球民族としてのアイデンティティー」を強調し始めた基地反対運動と、「いつの時代も沖縄は日本に巻き込まれ、利用されてきた」という被害者の視点から語られる歴史教育がこの問いを生み、私の頭を悩ませました。

その中であって、確固たる自分のアイデンティティーを求めて学び始めたのが沖縄戦と祖国復帰の歴史です。沖縄戦がいかに激しい戦いであったか、筆舌に尽くし難い当時の状況を改めて認識しました。そしてその戦いに、私よりも若いほんの中学生ほどの男子生徒や女子学生までが、「祖国のため」という言葉を遺し、若い命を散らしたことに涙ができました。「戦争に巻き込まれた」という被害者史観とは真逆で、戦争という時代の運命から決して逃避することなく、祖国防衛の使命を自覚し、国家の主体者として一生の全てを尽くした悲しくも尊ぶべき沖縄県民の姿を見ました。字義通り、「我が身を盾にして」日本を守った沖縄県民は、立派な日本人であったと心から思いました。

それにもかかわらず戦後27年間、沖縄は米軍統治下に置かれますが、その中であって県民一人一人が願い、選んだ道は、異民族への従順でもなければ、沖縄独立でもない、祖国日本への復帰でありました。「沖縄県民にとっての日本」とは紛れもなく祖国であったわけですね。私達沖縄県民の先輩方は、戦時中は命懸けで祖国を守り、戦後はたとえ国土が分断されようととも復帰の実現によって沖縄と本土の「日本民族としての絆」を守り抜かれたことに気付きました。この歴史に感謝と誇りの念を抱くと共に、沖縄にこそ祖国防衛の使命があることを感じます。

## 日本民族にとっての沖縄



3位

池澤 いけざわ

盛之 もりゆき

(38)

沖縄県糸満市出身



私は、沖縄は正に日本の縮図であると考えます。

戦後日本が抱える様々な問題が、沖縄に重く重く横たわり続けているからです。

沖縄に横たわるものを、日本民族一丸となり解決に導くことで、日本の問題もまた同時に解決し、日本沖縄の未来は光り輝くことになるかと確信しています。

何故なら、戦後生まれの私達には、決して教えてもらえなかった、『日本の国柄とは。日本民族とは。日本精神とは。護国精神とは。』そうした戦後失われていった、真実の宝が沖縄に眠っているからです。

基地問題では賛成反対か、何十年も同じ議論が続けています。まるで悲喜劇でも見ているようです。そんな対立や争いより、アジア日本の平和に必要な防衛体制、自主防衛の為に必要なこと、その覚悟や戦略、憲法改正についてももっと深く国民的議論を巻き起こす事が大切です。

いつになれば、私達は議論を終え会議室を出て、次のステージへと行けるのでしょうか？琉球独立論では冗談みたいな『とんでも論』を本気で考え、国連や国外で運動する団体まであります。そのような動きを許してしまうのは、私達の帰属意識、民族意識が希薄化し、祖国への薄れゆく愛が根本原因であり、あらゆる問題を引き起こしているのです。

沖縄の問題を解決する為に、圧倒的に様々なことやモノや人が足りない現状があります。ただ朝鮮半島、米国、中国に関しては研究者や団体も多く、マスコミ、ネットでも日夜情報に溢れ議論されています。

在野には素晴らしい知恵、能力ある方が多くいます。そうした方々が沖縄の為に活動することはとてつもなく大きな力に成るのです。

早くそうした体制を希望するのは、ある懸念や大きな不安が頭をかすめるからです。

基地反対運動、独立論、中国の領海侵犯、そうした現状の中で沖縄で平和に暮らす私の家族や大切な人々。例えば米軍が撤退し、突然侵略された場合、本当に国や政治が動き、どのような犠牲を払っても護り奪還できるのでしょうか？

役立たずでも私の命を使って構いません。大切な人を護る為ならどんなこともします。

しかし、現実には竹島を韓国に支配され、北朝鮮に拉致された方々を取り戻せず、北方領土問題も未解決のまま。非情な現実がチベットやウイグルに起こる中で、真剣に動く方は限られ、マスコミは沈黙し芸能ばかり。諦め無関心に覆われているこの現状では、果たして非現実的だと笑えるのでしょうか。





3位

池澤 いけざわ

盛之 もりゆき

(38)

沖縄県糸満市出身

何事にも幾重の想定や準備が大切です。必ず自国自国民を安心安全に護ることのできる普通の国へと変えてゆかなければなりません。こうしたことを友人や周囲に15年以上伝えてきました。どうしてそこまで熱く国を想えるのかとよく聞かれます。

私は五歳から歴史が大好きで図書館に通いつめる少年期を過ごし、父が自衛官である影響から政治経済、軍事など一人学び考える学生でした。日本悪玉史観に浸かった昭和史、沖縄戦を学ぶ中で疑問を持ち手にとった本、渡部昇一先生の「かくて昭和史は甦る」のお陰もあり、洗脳から覚めましたが、まだ真の覚醒には遠かったのです。知識はあっても、まだ芯のおった愛国心を持つには至らなかったのです。

人生において時に死んでしまった方が楽になるような理不尽なことが起こります。それは、私の人生にも起こりました。20歳を過ぎた頃、心の病を患い、生き地獄のような日々、戦い続ける日々が10年以上続きました。誰かの支えや助けもなく、たった一人暗闇の中進まないとならなかった時、暗闇から再び立ち上がり、生きる力を与えてくれたのは、日本の先人の物語でした。楠公、大西郷、明治昭和の偉人の方々、大田實中將、島田叡知事と共に、沖縄日本を命を賭し護り続けた軍人沖縄県民の生き様。

絶望の中、悩み苦しみ 苦難悲劇に襲われても 立ち上がり生きてゆく

志を果たす為、命を懸け全身全霊で闘う先人の生き様に、私は魂が震え、絶対に諦めず、どんなに泥まみれでも生きてゆこう、と心に誓いました。

人にはアイデンティティーは欠かせないものです。私個人の自我が崩壊し、生きる価値を見いだせない時、生きる支えに気がついたのです。それは「日本人であることの誇り」でした。私の命を救ってくれた、愛する日本沖縄をどこまでも想い護り続けた先人の魂を受け継ぎ、熱く燃やし続け、真っ直ぐ生きてゆくと心に決め生きてきました。病の体験は、人生を呪い、恨んでいた私に、逆にかけがえのないものを与えてくれたと思っています。

こうして民族の誇りが生きる支え、希望となり前進した私は、心優しい日本の人々にも助け支えられ、自分を取り戻し、祖国への感謝を胸に、出会った人々に先人の崇高な生き様を伝えています。こうした一人の人間の人生を大きく変え、命を救う力が日本民族の神話、先人の偉大な歴史にあるのです。

私達の大きな宝を取り戻してゆきませんか。

祖国日本を取り戻す為、日本民族一体となり、太陽のように大いなる国に変えてゆきませんか。

あの日誓ったように、私の人生を懸けて祖国へ恩返しすることをまたここに誓います。

## 母校から見る民族の精神



高里  
たかさと

智佳  
ともか

(26)

沖縄県浦添市出身

国を一つにまとめる際に大切なのが、民族精神の統一であり、それは他国だけでなく日本においても同じです。ですから「日本民族にとっての沖縄」を考えるならば、一民族として忘れてはならない精神を、歴史的・文化的に残す島だと私は考えます。そして私の母校である首里高校の歩みが、それらを証明しているのです。

沖縄において「故郷を想う」という一つの民族精神が、顕著に表れた出来事といえば、沖縄戦から祖国復帰に至る流れではないでしょうか。

首里高校の前身である第一中学校の先輩方は、沖縄戦時、鉄血勤皇隊と通信隊として二七三名が戦場に赴きました。出撃前には教官より「遺骨は残らないと思え」と言われ、ご遺書と共に毛髪と爪が残されていることには、当時の沖縄の緊迫した空気を感じずにはいられません。その壮絶さの通り、生存者は四七名、二二六名が散華されています。先輩方のご遺書には「皇国のため敵兵から郷土沖縄を守るために散ることは、日本男子としての本望であります」との強い想いと共に、家族と故郷を想う言葉が残されています。まだ十代だった先輩方ですが、その姿は「故郷を愛し、故郷を守る」という民族精神を持った、まさしく日本男児であったと思うのです。

その後敗戦と共に、沖縄は長い占領期を迎えますが、一中健児の強さはしっかりと後輩たちへと受け継がれていきました。

昭和三三年の夏、沖縄を沸かせたのは夏の甲子園でした。その年は第四十回記念大会で、大会史上初の全都道府県に沖縄を加えた四十七校が甲子園へ集まりました。

首里高校は戦後初の沖縄代表として出場し、強豪校相手に奮闘するも初戦敗退。首里高ナインは甲子園の土をバッグに詰め、沖縄へと帰ります。数日の船旅、やっとついた那覇港で彼等を待ち受けていたのは「持っている土を出しなさい」というキャプテンの指示と、海へと捨てられていく甲子園の土でした。それは、外国の土を持ち込んではいけないという、米国の法律に触れたためです。ナインの中には、甲子園の土を仏壇に供えようと思っていた方もおられたようですが、その願いも土とともに海へと溶けてゆきました。

この出来事は、当時、祖国復帰を強く願う県民を、さらに熱くさせるものだったようです。

このように私の先輩方は、故郷沖縄を決死の覚悟で守るという精神を体現し、戦後は故郷日本を想う県民を鼓舞させることに至りました。ですから、一中の歩みとは、「故郷を想う」という一つの民族精神を、歴史の一端として未来へと繋ぐ役割を担っているのです。

そしてもう一つ、民族の精神を文化的に残している点においても、一人の人物に焦点を当てたいと思います。その方は第一中学校より二つ前の尋常中学校の生徒の一人、沖縄学の父と呼ばれる伊波普猷です。

伊波は、沖縄の万葉集と呼ばれる『おもろそうし』を言語学的視点から研究し、日本の言語を研究する際は琉球の研究が必要であり、万葉集が「日本人の精神的産物」であれば、



高里  
たかざと

智佳  
ともか

(26)

沖縄県浦添市出身

おもしろそうしは「琉球人の精神的産物」であると述べています。

さらに沖縄にある神話や宗教に対しては、儒教や仏教、道教の分子を取り除くと、日本の神道と同じようなものが残ると言い、「神話や宗教の比較研究は両民族の心理的一致を確かむるに至って必要なもの」とも言っています。

そして伊波は、最期の著書である『沖縄歴史物語』の中で、沖縄戦により甚大な被害を被った故郷へこのような言葉を残しました。「とりわけその文化財のみる影もないまでに破壊し去られたのは、惜しみてもなほ余りあること」。

この言葉により、伊波を冷酷だと思う方もいるようですが、私はそうとは思いません。

なぜなら伊波は、日本と琉球は同じ祖先を持つという日琉同祖論を提唱していました。有形・無形を含めた沖縄の文化財は、日本人と沖縄の人々を目に見える形として繋ぐ、民族の象徴であると考えていたと思うのです。ですから、失われた文化財に想いを馳せたその言葉は、敗戦により未来がわからなくなってしまった沖縄を案じた、伊波なりの故郷への愛だったと思うのです。

そのように、沖縄を誰よりも愛し、憂いた伊波が残した研究結果によって、沖縄の文化財は祖先を知るためだけのものではなく、古代より残る日本民族の考え方や感性などを示す「民族の精神」を残していると私は考えます。

ですから沖縄に目を向けるとき、つい目先の問題ばかりを見がちですが、今後は日本民族にとっての沖縄の役割を、地政学的視点のみだけでなく、民族の精神という視点で、歴史や文化を紐解くことも大切になると思います。

歴史や文化とは、民族の記憶であり記録です。どうかそれらを疎かにせず何百年という先をも見据えた視点で、沖縄を、そして我が国を見ていただければと思いますし、私も歴史を学んできた者として、歴史を紐解き、先輩方のように民族の精神を後世へと繋いでいきたいと思っています。



## 今の沖縄について、私が感じたこと



青山  
あおやま

泰大  
やすひろ

(26)

千葉県市川市出身

皆さん、修学旅行先の人気No.1は、どこかご存知でしょうか？平成27年の日本修学旅行協会の調査結果によると、国内では沖縄がNo.1です。

沖縄が、なぜ？選ばれているのでしょうか？

それは、平和学習です。この平和学習という言葉聞いて、皆さんは、どんなイメージを持っていますか？

修学旅行と言えば、「ショッピングに行き、テーマパークなどに遊びに行っている」イメージを持っていた私は平和

学習の為に学生たちが訪れていると聞き少し驚愕しました。平和学習と聞くと「戦争の歴史を学んで、命の大切さを感じて欲しい」というイメージを持っています。

私は沖縄に二度行きました。個人的に、沖縄に行こうと思ったきっかけは、とある演説大会で、沖縄出身の方の演説を聞いた際、自分の目で、沖縄の歴史を見たいと感じたからです。

沖縄と言えば、ひめゆり学徒隊を聞いたことがある方がいると思います。学徒隊とは、沖縄戦争の際に主に女子中高生によって構成された看護部隊です。

沖縄に訪れた際、私は白梅学徒隊が、祀ってある白梅の塔という場所に行きました。その場所は、知人曰く訪れる人が少ない場所と言われており、私が想像していた、いわゆる観光名所のイメージとは違って少し驚きました。この場所で、命を落としてしまった方の想い、戦争の傷跡を確かに肌で感じました。

学徒隊の彼女達が、自らの命を絶った自決の壕という場所があり、目の前に立った時に、「ここでどんな想いで、自らの命を落としたのだろうか？」言葉では表せない気持ちになりました。

再び、白梅の塔に訪れた時には、観光バスが2台停まっており、たくさんの修学旅行生達がいて、現地のガイドさんが白梅の塔について説明しているところでした。

私は、何の目的で白梅の塔に学生たちが訪れるのかどうしても気になり、ツアーガイドさんに直接聞いたところ、「平和学習を目的として、来ているのです」という回答を頂きました。

修学旅行生達が、平和学習の為に、なぜ白梅の塔にわざわざ訪れているのか、そもそも平和学習とは何なのか？と帰宅してからいろいろと調べました。そのときに修学旅行で、自虐史観を持たせる教育が行われている事実を知りました。自虐史観とは、日本は悪い事をした国だ！と負の部分強調する教育です。

とある教育に関して綴られている本を読んだ際に、生徒たちの前で「私は、日本人にうまれた事を恥ずかしく思います。」と発言した女性教員がいたという事が書かれており、その事実を知った時は、衝撃を受けました。その女性教員は戦争で日本人がやってきた事を悪と感じそういった発言をしたとも、その本に書かれておりました。

戦争の話聞いてどのように感じ、思うのは自由です。しかし、物事を教える教員が生徒にそのような発言をすることによって、影響を受けてしまう生徒も少なからず出てきます。



それは、子供たちが戦争に対しどのように感じ、思う自由を妨害する発言だと思いました。このまま、自虐史観を持たせる教育が続けば、子供達の発想力や考える自由が無くなり、固定観念を植え付けられる状態になってしまうのではないかと危機感を持ちました。少なからずともその女性教員も自虐史観の教育を受けた影響からくる発言なのかもしれません。

どうすれば、戦争を知らない世代の人たちに、戦争の歴史を正しく伝えていけばいいのか？ずっと考えました。

この現状をなんとかしなければならぬと考え、百聞は一見に如かず。現状を解決する方法を探すために、去年の12月沖縄に再び行き、15か所ある学徒隊の慰霊碑を巡りました。滞在期間中は11か所訪問することが出来ました。学徒隊の慰霊碑巡りをしている中で、現地で感じたことをお話しします。

私は、荒崎海岸にあるひめゆり学徒散華の跡を訪れました。その場所は、彼女たちが、逃げ場を失い自ら命を落とした場所です。当時、彼女たちは、その足元を見ている余裕すら無く、ボロボロの靴を履き、米軍からの激しい爆撃・爆風が、降り続ける中で、命がけで逃げ続けました。実際に歩いて見ると、足場は悪く、ゴツゴツしており、常に足元を見ていないと、いつ転んで怪我をしてもおかしくない状況で、一歩歩くだけでも一苦勞でした。

ネットや本で調べるのも大事ですが、私は、学徒隊の慰霊碑を訪れた時に、自分の目で、直接確かめる事で、学徒隊の心を感じることが出来ました。私達は、中学生や高校生の時に何をして過ごしていたのでしょうか？ 当たり前のように、学校生活を謳歌したり、友達と遊んだりしたのではないかと思います。今、こうして平和な生活を過ごせるのは、国の為に、命を懸けて戦って下さった先人のお蔭です。日本民族にとっての沖縄は、悲惨な出来事を経て日本が平和になったという歴史を直接自分の目で確かめられ肌で感じる事ができる場所だと思います。私が直接訪れた際、民間人も巻き込んだ悲惨な戦争の裏側で、日本兵を支えてくれた人達がいたのだと実感し、自然と感謝の気持ちがこみ上げてきました。

今年の6月23日慰霊の日に再び沖縄に行きます。平和祈念公園にて行われる追悼式に参加する予定です。現在では戦争を経験された話を聞けるのは私たちしかいません。戦争を体験された方から、次世代の私達が平和のバトンを引き継ぐのです。今を生きる私たちがしなくてはいけない事は、学徒隊の皆様や支えてくれた方、そして尊い犠牲になった方々を忘れないことです。



## 日本人として育ったことに対する感謝



「いやしくも祖国を有し、それと一連の共通の文化と歴史を持ち、日本人としての民族的矜持を有する沖縄の住民が、どうしていつまでも異民族の統治下に満足しておられましようか。」

これは、沖縄が米軍統治下にあった昭和28年、参議院に参考人として招かれ演説をした沖縄教職員会会長の屋良朝苗（やら・ちょうびょう）氏の演説の一文です。

私は平成6年生まれの、ごく一般的な沖縄県民です。生まれたときから沖縄は日本であり、それが当たり前だと思い祖国復帰の歴史については深く考えたことはありませんでした。しかし、祖母や父の影響を受けて、祖国復帰について勉強を始めたのも最近のことです。その中で、この演説に参加しようと思ったのは、冒頭で紹介した屋良朝苗氏演説に強い衝撃を受けたからです。

屋良朝苗氏とは、沖縄県復帰前の教職員会会長として、沖縄県復帰運動のリーダーを務め、1968年に米軍基地全面撤去を訴え革新統一候補として琉球政府の行政首席に当選し、任期中に沖縄県祖国復帰を果たした政治家です。沖縄ではその名前を知らない者はいない大政治家ですので、私もその名前を知っていましたが、革新政治家というイメージが強く翁長雄志のような革新政治家だと思っていました。その屋良朝苗氏が、現在の保守政治家からも聞いたことの無い、強烈な日本人としての魂の叫びのような演説を行っていたことに、私は大きな衝撃を受けたのです。

屋良氏はこの演説で、沖縄の子どもたちの教育についてこのように語っています。

「われわれは教育上数々の障害を身をもつて体験しつつあるのであります。たとえば今沖縄の子供たちが使用している日本地図から沖縄の地図は消えております。また戦争は終結したにもかかわらず、国旗さえ自由に立て得ないのであります。その上に祖国の子供たちと共通の国民行事さえ持ち得ず、さらに何ら国家的恩恵にあずかり得ないのであります。かかる境遇にある子供たちがどうして真実の日本人として素直に成長して行くことができましようか。」

「われわれは何とかしてこの障害を排除して、畸形的な架空的な逆境から脱却して、永遠に向って伸び行く子供たちを一日も早く本然の姿において育て、素直な成長に空白を残さないように熱願しているものであります。それこそは一日も早く沖縄が元の沖縄県として祖国に復帰することによつてのみかなえられることであります。」

私は屋良朝苗氏のこの言葉で始めて、祖国復帰の目的がわかったのです。結局、屋良氏の祖国復帰運動とは、沖縄の子どもたちを日本人として育てたいという教育者としての強

仲村  
なかむら

隆次  
りゅうじ

(24)

沖縄県那覇市在住



い使命感だったのです。そして、屋良氏がその使命を果たしたおかげで、「あなたは何人か？」と聞かれたら「日本人です。」と100%自信を持って応えることができる自分がここに存在するのだということがわかったのです。

では、今の沖縄を振り返るとどうでしょうか？命をかけて祖国復帰を実現に導いた屋良朝苗先生が今の沖縄を見たらどう思われるのでしょうか？最も気になるのは、2010年以来国連が「日本政府は琉球・沖縄の人々を先住民族として公式に認め保護せよ」という勧告を5回もだしていることです。そして、屋良氏を担いで知事にした革新政党の後輩たちが、その勧告をなんと支持しているということです。

屋良朝苗氏が沖縄の子どもたちを日本人としての教育を施したいという一念で、祖国復帰を果たしたのに、今度は、180度ひっくり返って、国連が沖縄の子どもたちを先住民族として教育せよと言っているのです。これは、笑い話のようですが、とても笑ってすませる話ではありません。更に10年、20年と国連が沖縄の人々を先住民族だという勧告を出し続けたら、いくら日本政府が拒否し続けたとしても、それを本当だと信じる国々が増えてくるでしょうし、それを信じて、自分は日本人ではなく琉球人だと思い込む沖縄の人も増えてくるかもしれません。こう見ると、今の沖縄は屋良朝苗氏が最も悲しむ方向に進んでいると言わざるをえません。

私は屋良朝苗氏から二つの恩恵を受けて深い感謝を持つようになりました。一つ目が、「日本に復帰した沖縄に生まれることができたこと。」そして、もう一つは「日本人として自覚が持てる教育を施されたこと」の二つです。しかし、今の子どもたち、これから生まれてくる子どもたちは、ひょっとすると日本人としての自覚が持てなくなってしまうかもしれません。なぜなら国連が先住民族の母国語で教育せよと勧告をだしているからです。

このような勧告を決して許してはなりません。私は、先人からの恩恵を受けたものとして、その恩恵を自分の代で終わらせるのではなく、次の代に引き継いでいく責務があることに気が付きました。100年後沖縄の子どもたちも誇りある日本人として生きていくことができるように、あらゆる努力をしていきたいと思います。これから、沖縄に日本人として生きる若者の代表として、「沖縄県民は誇りある日本人だ！」という声をあらゆる手段で発信し示していきたいと思います。その時に、私の声を聞いた方は、どうか、それが世界中に発信できるように拡散のご協力をお願い致します。ご清聴ありがとうございました。



## 沖縄と本土が紡いできた歴史



いま沖縄と本土の関係はかつてない程、危機的状況を迎えています。本土の人々と沖縄にいる人々の間には価値観のズレが大きく広がろうとしています。基地問題、沖縄・本土との経済格差問題など、問題は複雑化し、本土との間だけではなく、沖縄内部でも分断に向けて加速し続けています。果たしてそれでよいのでしょうか。我々には共に紡いできた「歴史」があります。

まず科学的に見ましょう。2018年に国立遺伝学研究所が発表した遺伝子研究によると本土の人々と沖縄の人々は父系の遺伝子において縄文人の遺伝をもっており、他の東アジアの人々とは違うことが判明しました。つまり我々のご先祖様は同じで、一番近い関係であると言えます。文化的な面では沖縄にも神話がありますが、この神話には国産みや神産み、日本神話におけるイザナミやイザナキに相当する夫婦神など類似性があると指摘されており、何かしらの影響を与えていたのではないかと考えられます。

日本史で登場したのは「続日本記」によると和銅7年(西暦714年)に石垣島・久米島の人々が朝廷に貢物行ったと記載されています。ここから本土との人々と交流が始まります。その後琉球王国を経て、明治維新後に、沖縄県となり、名実共に日本の一員となりました。しかし大きな不幸が襲い掛かります。大東亜戦争による米軍の沖縄侵攻です。日本側の死者は約18万人の方がなくなりました。牛島満大将、太田実中将とはじめとする65000余柱の県外英霊の方、また島田叡知事など沖縄を必死で護ろうとしていた方々がいました。しかし力及ばず沖縄は米国に支配される結果となりました。

これにより現在の問題に繋がる課題も残しました。この沖縄の苦難に最も心痛めている方がおりました。それは昭和天皇と上皇陛下です。昭和天皇は1945年の敗戦後、沖縄に対して想いを寄せられていました。昭和天皇は終戦後、戦争で苦勞された方々を労うために各地へ行幸されました。しかし唯一行くことが出来なかった場所、それが沖縄でした。晩年沖縄に足をお運びになれるチャンスがありましたが、ご病気を患い、その夢は叶わないものとなりました。昭和天皇はその悔やむ想いを御製いわゆる和歌として遺しました。

「思わざる病となりぬ沖縄をたずねて果さむつとめありしを」

計り知れない無念な想いが昭和天皇にはございました。そのお気持ちは先月末譲位された上皇陛下に引き継がれました。陛下は1975年7月皇太子時代に、美智子様とご一緒に初めて沖縄に来訪されました。その際殿下の沖縄訪問に対して反対をする過激派から火炎瓶を投げつけられるテロ行為に遭われました。幸いにもお怪我はございませんでしたが、一歩間

齋藤  
さいとう

仁貴  
まさき

(27)

千葉県柏市出身



齋藤  
さいとう

仁貴  
まさき

(27)

千葉県柏市出身

違えば本土と沖縄に大きな溝が出来かねない重大な事件でもありました。しかしこのような一大事に見舞われても、即位後も沖縄に行幸し、沖縄の人々に想いを寄せられています。これは昭和天皇と上皇陛下は沖縄も大御宝の一員であるとお示されているとお姿なのです。

このような様々な経緯や歴史を紡ぎながら、絆を深めていった流れがあります。事実2017年沖縄タイムス・朝日新聞による沖縄県民への調査で「日本へ復帰して良かった」という質問に対して「よかった」が82%と圧倒的に支持されている結果が出ました。特に18歳から29歳までの支持率は90%、30代でも86%と若年層世代は好意的に捉えています。つまり次世代を担っていく沖縄の同世代は「沖縄は日本の一員である」と意思表示をしています。私も沖縄の同世代にレスポンスをしたいと思います。

沖縄は共に支えあっていく仲間だ、見捨てたりはしない。紡いできた歴史は壊れない。最後になりますが、国家内で対立が起き、国が滅びることは歴史が証明しています。日本もその危機的状況迎えた時期が幾度とありました。その際、どのようにして回避していったのか。それは冷静に誰が裏で手を引いているのかを見極めることです。人々の良心に漬け込んで、奪い取ろうとしている者こそが本物の悪です。騙されないためにも県民・国民同士が分断されないこと、相互に内ゲバにならず理解していくことが大切です。そのためにも若い世代が思想、境遇、立場の違いを超えて一致団結して問題を乗り越えていくことが大切です。私は若い世代の集結を行なっていきます。

危機的状況こそ人は強くなります。この機会には双方の絆を一層深めるチャンスです。我々の手で新たな歴史を紡いでいきましょう。



## 日本の誇りをかけて実現させた沖縄返還

佐久川 眞  
さくがわ まこと

沖縄県出身

非公開

1972年5月15日沖縄県祖国復帰。日本にとって大きな功績です。今回、みなさまにその功績に大きく貢献した人物の1人をご紹介します。佐藤栄作、当時の内閣総理大臣だった人物です。

大東亜戦争終結後、日本はアメリカに沖縄の領土を奪われました。沖縄は27年もの間、アメリカに統治され続け、立法、行政、司法すべてが支配下にありました。

この沖縄返還、世界的にも歴史的にも偉業と言われています。偉業と言われる所以は、2つあります。まず、1つ目、それは「外交で取り戻した」ということ。当時、奪われた土地は武力を一切使わずに交渉で取り戻すことは、当時ではありえないことでした。2つ目は、その「期間」です。例えば、最近までイギリス領にあった「香港」は、外交交渉で100年以上たったあと、1990年代になって中国へと返還されました。それを沖縄返還は、「27年」という期間で取り戻しています。この偉業を成し遂げた人物こそ佐藤栄作になります。

今は、観光場所として、多くの人に愛されていますが、もしもまだ返還ができていなかったら、どうなっていたのでしょうか。日本語の教育を受けていたのかもわかりません。今、沖縄が日本に返ることができるのは、佐藤栄作の政治生命をかけた行動によるものでした。

では沖縄返還をどのように成し遂げていったか、お話ししていく前に、当時の状況をお伝えします。

まず、戦後間もないころ、貧しかった日本は、日本政府によって高度経済成長を迎え、猛スピードで生活が発展していきました。一方で沖縄は、アメリカ政府または軍人のもとで生活を築いていきました。当時の生活を見てみると、例えばお金がアメリカ通貨、車線が右、沖縄県から出入りする際にはパスポートが必要と、日本本土とは異なる生活です。

戦後の沖縄というのは、痛々しい状況です。米軍による暴行、殺人、強姦事件が多発していました。6カ月の間に殺人の被害、婦女暴行、強盗、殺傷事件が2日に1回は事件が起きているペースです。無法状態で気軽に外も歩けません。犯罪者を捕まえてもアメリカの占領下になっていたわけですから、日本国の法律では裁けない。誰がどう見ても悪さをしているのに、無実になるわけです。

さらに米軍は基地をつくるために、沖縄県民が汗水たらして作った畑をブルドーザーで、わずか数分間で踏みつぶし、工事をしていったんです。抵抗しようとしても銃剣を突き付けられ、抑圧される。

また、アメリカにとって沖縄は戦略的にとても重要な地理的条件を満たしていました。戦後、ベトナム戦争では沖縄の島は経路基地としてかなり重宝されていました。だから、復帰への道のりはかなり厳しかったのです。

沖縄の返還は当時の天皇陛下である、昭和天皇も願っていたことでもありました。その気持ちを和歌にした言葉が今も残っています。

そんな中で、佐藤栄作が沖縄返還の実現に向けて動き出したきっかけは、ある2人との出会いです。1人目は、戦後直後の総理大臣であり、サンフランシスコ講和条約を成し遂げた吉田茂。佐藤は吉田がサンフランシスコ条約でできなかった沖縄返還を託されていました。2人目は当時参議院議員であった「山中貞則」という人物です。彼は戦後の沖縄の状況を知っている人であり、そのことを佐藤に伝えました。佐藤は、この2人の出会いを受け、「沖縄返還」に政治生命をかけて実現させることを決めたのです。

佐藤は総理大臣就任後に沖縄へ現役の内閣総理大臣では初めて沖縄に降り立ち、有名な那覇空港でのスピーチを行いました。

「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、わが国にとって戦後が終わっていない」

佐藤栄作は沖縄が戻ってくるまではまだ日本は完全じゃない。つまり沖縄を日本に取り戻すとそう言ったのです。沖縄県民にとってどれだけ救われた言葉となったか。どれだけの県民が希望と期待を抱いたか。

佐藤はその言葉通り、アメリカとの交渉を着実に進め、野党の反対を押し切り、沖縄祖国復帰にまでこぎつけました。佐藤は自身の政治生命をかけて沖縄を日本に取り戻しました。

この返還は、地上戦で多くの先人たちを失ったかけがえのない沖縄の地を取り戻すことができました。そして、敗戦国が対等に交渉で進めることができ、日本が自立した国だと示すことができた、日本の維新をかけた返還だったと私は感じています。

沖縄返還は佐藤栄作だけではありません。同じ強い想いを持った人たちが当時にはいました。私たちはそのような人たちを忘れてはいけません。日本を良くするために、社会を良くするのは自分たちだと闘ってきた人たちがいたのです。

私は一社会人として、まずは目の前の人、そして会社から、そうやって戦ってきた先人たちが居たことを伝えていき、「この社会を、この日本を良くするのは自分たちだ」と考える人を多くつくっていきます。





# 出場弁士大募集！

～伝えよう！祖国復帰の真実、語り合おう！その志～

沖縄県祖国復帰48周年記念靖国集会

## 第2回 青年弁論大会 「日本民族にとっての沖縄」

本選スピーチ：令和2年5月16日(土) 13時～



沖縄県祖国復帰50周年まであと「2年」！

◎応募〆切：令和2年4月13日(月)

### ■選考方法

- ・テーマについての論文提出(2000文字以内)
- ・締め切り：令和2年4月13日(月)
- ・提出先：nakamura.satoru7@gmail.com

### ■参加資格

- ・40歳未満で日本国籍を保有する方

### ■選考

- ・発表：令和2年4月17日(金)(ご本人に連絡致します。)

### ■本選スピーチ

- ・日時：令和2年5月16日(土) 13時～
- ・場所：靖国会館2F(靖国神社境内内)  
※沖縄県祖国復帰48周年記念靖国集会のプログラムとして行います。また、午前中に昇殿参拝を行う予定です。

### ■お申込み方法

- ・氏名、年齢、性別、電話番号、emailアドレス、タイトルを記入の上、nakamura.satoru7@gmail.comへ送信をお願いします。フォーマットは自由。

### ■原稿

- ・原稿はwordまたはwordと互換性のあるワープロソフトをお使いください。

### ■本選について

- ・弁論の時間は8分以内 制限時間を超過した場合は減点の対象となります。
- ・採点基準  
表現力、論理展開、実践(4:3:3)
- ・表彰  
優勝、準優勝、3位、
- ・審査委員  
政治家・言論人・有識者へ調整中



当QRコードを読み取ると  
各弁士の弁論を動画でご  
覧いただけます。